

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：17301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：24520162
研究課題名(和文) バウハウス以前の工房教育についての研究

研究課題名(英文) Pre-Bauhaus Workshop Education in Germany

研究代表者
針貝 綾 (HARIKAI, Aya)
長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：70342425

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、19世紀末から1919年のバウハウス創設までのドイツにおける、工房教育による美術工芸の教育改革や新しい美術工芸教育の試みについて明らかにすることにある。

本研究では特にシュトゥットガルト教育実験工房や応用自由美術教育実験アトリエの綱領やカリキュラム、教育の実態について調査研究を行った。それにより、本研究ではミュンヘン手工芸連合工房に關与した芸術家たちがそれらの教育施設の設立、綱領やカリキュラム、創成期の教育に深く關与し、工房教育概念の導入により美術工芸教育の改善を試みたことを検証した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify ideas and details of workshop education for artistic handicrafts in Germany from the end of the 19th century to the year of the founding of the Bauhaus(1919).

The study includes an investigation of programs and curriculums etc. of the Wuerttemberger Royal Teaching and Research Studio in Stuttgart, and the Teaching and Research Ateliers for Fine Art and Applied Art in Munich. As a result of this research, it is revealed that the artists, who worked in the United Workshops for artistic handicrafts in Munich, having settled in those facilities, played a great role in designing the programs and the curriculums, and in reforming the education of artistic handicrafts by means of the introduction of concepts of workshop education.

研究分野：人文学(美学・美術史)

キーワード：工房教育 ドイツ 近代 美術工芸 バウハウス前史 ミュンヘン手工芸連合工房 シトゥットガルト教育実験工房 応用自由美術教育実験アトリエ

1. 研究開始当初の背景

筆者は平成 20～22 年度科学研究費補助金(若手研究(B))「近代ドイツにおける美術工芸工房の比較研究」において、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ドイツ各地に相次いで設立された美術工芸の「工房」の「制作の場」としての側面に注目し、「工房」において制作された作品とその万国博覧会や美術展における展示について研究を行ってきた。この研究を行う中で、筆者は工房には本来「教育の場」としての機能があり、「工房」の存続には教育工房の存在が不可欠であるとの認識に至った。また、筆者は近代ドイツの美術工芸の諸工房に図案家として関わった多くの芸術家たちが後に美術工芸学校や工科大学の教員となって教育改革に携わる一方、ドイツ工作連盟の創立会員となって、その綱領に後進教育の重要性を説く項目を組み込んだことに注目した。

そこで、本研究では近代ドイツの美術工芸の諸工房、とりわけミュンヘン手工芸連合工房とドイツ手工芸工房に図案家として関わった主要な芸術家たちの、美術工芸のための教育施設における工房教育による教育改革について研究を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究は、19 世紀末からバウハウス創設までのドイツにおいて試みられた美術工芸の工房教育について、その教育理念やカリキュラム、実際の教育内容等について明らかにすることを目的として調査研究を行った。

3. 研究の方法

本研究では特にミュンヘン手工芸連合工房とドイツ手工芸工房の図案家たちの各地の美術工芸の教育施設での教育改革への関与に着目し、ドイツ手工芸工房附属工芸専門学校・教育工房、応用自由美術教育実験アトリエ、シュトゥットガルト王立教育実験工房

の綱領や年次報告書等の資料により、設立の経緯や教育理念、カリキュラムや工房教育の実態について検討した。

4. 研究成果

(1) シュトゥットガルト教育実験工房

シュトゥットガルト教育実験工房については、2010 年にエッケハート・マイが著書『19 世紀ドイツ美術アカデミー：伝統とアヴァンギャルドの間の芸術家教育』第 8 章「90 年代：ゼツェッションと前衛芸術」の中でワイマール、プレスラウと並ぶ美術アカデミー改革のひとつのモデルとして取り上げている(註 1)。また、2011 年にはウルリーケ・ビュットナーが論文「1896-1933 年の美術工芸学校」(ニールス・ビュットナー、アンゲラ・ツィーガー編『シュトゥットガルト造形美術アカデミー 250 周年』カタログ)の中で、同造形美術アカデミーの前身のひとつとしてシュトゥットガルト教育実験工房に言及している(註 2)。以上の先行研究を踏まえ、本研究ではシュトゥットガルト文書館及びヴュルテンベルク州立博物館等においてシュトゥットガルト教育実験工房の綱領や年次報告書等の資料を収集し、同工房の設立の経緯やカリキュラム等についてミュンヘン手工芸連合工房との関係に注目しながら検討を行った。

シュトゥットガルトのヴュルテンベルク王立美術工芸学校教育実験工房(Lehr- und Versuchswerkstätte der Königlich Württembergischen Kunstgewerbeschule zu Stuttgart. 以下、シュトゥットガルト教育実験工房と呼ぶ)は、1901 年にヴュルテンベルク王立美術工芸学校の独立部門として設置された美術工芸のための教育実験工房である。

ヴュルテンベルク王ヴィルヘルム 2 世(Wilhelm II. Von Württemberg, 1848-1921)は、芸術家支援を通じた地域産業活性化を目指した。その際、彼はヴュルテンベルク王立美

術工芸学校教授カルクロイト伯とグレーテに助言を求めた。彼らはヘッセン大公エルンスト・ルートヴィヒによるダルムシュタット芸術家コロニーの芸術性を高く評価したが、その生産体制や後継者の問題を指摘し、ミュンヘン手工芸連合工房のシュトゥットガルト移転をヴィルヘルム2世に提言する。同工房のシュトゥットガルト移転は頓挫したが、その案はシュトゥットガルト教育実験工房構想の礎となった。

シュトゥットガルト教育実験工房は、ヴェルテンベルク王立美術工芸学校内に1901年12月9日に創設された。教育実験工房の最初の主任教員として、ミュンヘン手工芸連合工房の創立会員であり、事務長であったフランツ・アウグスト・オットー・クリューガー（Franz August Otto Krüger, 1868-1938）と、同工房の創立会員のひとりであるベルンハルト・パンコック（Bernhard Pankok, 1872-1943）がミュンヘンから招聘され、クリューガーが教育実験工房の初代施設長となった。

まず1901年末に家具工房が刑務所（Zuchthaus）内に完成し、1902年1月15日に工房教育が開始された（註3）。また、ゼーネフェルダール通りにいくつかの作業室と木材工房が開設された（註4）。1901-1902年度の年次報告書には生徒が金属工房とその他の美術工芸の工房に所属した記録があることから、家具工房完成後1901-1902年度冬学期の間に教育実験工房には金属工房とその他の美術工芸の工房も開設されたと推察される。教育実験工房は広く美術工芸の教育と芸術的な美術工芸の図案と原型の制作を目指し、その後1905年には陶磁器工房（図1）、1912年にはカーペット工房が増設された。

授業は工房ごとに、自然研究、応用製図、すなわち図案と専門製図、工房制作が行われ、価格計算の授業や研修旅行は工房共通に実施された。教育実験工房でも形態の造形把握力を高め、図案のためのモチーフを研究する

ことを目的として、自然研究では裸婦や動物、植物、標本等をモチーフとしたデッサンや彫塑といった基礎的な実技が行われた。また、「美術工芸の材料についての講演」では美術工芸の材料の取り扱い、「価格計算、簿記等」では為替手形や産業活動についての法的な規定についても教授されることになっていた。研修旅行については、美術館や博物館、企業の見学が実施された。

最初の教育実験工房の綱領には同工房の事務長を務めていたクリューガーが作成に深く関与し、教育実験工房での美術工芸教育にはミュンヘン手工芸連合工房の工房教育の理念が色濃く反映されていたと推察される。教育実験工房は1913年にはローラ・エーベルハルト教授率いる刺繍、ボビンレース編みとパティック工房を含む女性部門とハフナーの教育工房、本の印刷・装丁部門が新設された後、美術工芸学校と統合されるに至り、連合工房よりも充実した、教育工房になったと考えられる。



図1 《陶磁器部門機械室，シュトゥットガルト教育実験工房》1907年頃

（2）応用自由美術教育実験アトリエ（デブシツ・シューレ）

応用自由美術教育実験アトリエについては、ヘルガ・シュモル・アイゼンヴェルスが論文「ミュンヘンのデブシツ・シューレ：応用自由美術教育実験アトリエ，ヘルマン・オ

プリストとヴィルヘルム・フォン・デプシツ、ミュンヘン」(1977年)の中ですでに詳細な研究を行っている(註6)。先行研究を踏まえ、本研究では『装飾芸術』誌に掲載されたオプリストの文章「応用自由美術教育実験アトリエ」等の資料を検討し、ミュンヘン手工芸連合同工場の関係に着目しながら応用自由美術教育実験アトリエについて再考察を行った(註7)。

ミュンヘンのユーゲントシュティルを牽引し、手工芸委員会の委員としてミュンヘン手工芸連合同工場の設立に関わったヘルマン・オプリスト(Hermann Obrist, 1862-1927)は、ヴィルヘルム・フォン・デプシツ(Wilhelm von Debschitz, 1871-1948)とともに1902年ミュンヘンに美術工芸のための学校「応用自由美術教育実験アトリエ」(Lehr- und Versuchs-Ateliers für angewandte und freie Kunst)を設立した。

応用自由美術教育実験アトリエでまず基礎教育として生徒たちが学んだのは、従来美術アカデミーで行われていた古典古代の彫刻の石膏デッサンや美術工芸学校で行われていた古典的な美術工芸の優品の模写ではなく、人体のデッサンやモデリング、そして自然のデッサンにより自然の本質を掴み取ることから発想する美術工芸の図案制作などの実技、および解剖学であった。その後、専門教育として各種工房に分かれ、自分たちが制作した図案を様々な素材で制作する技術を身に付けた。工房には、金属工房、陶・鋳造工房、スタッコ工房、建築造形工房、グラフィック工房、家具工房、写真工房等があり、生徒はそれらの工房を自由に選択し、工房を行き来することができた。

基礎教育の内容や素材別の工房に分かれて専門教育を受ける所など、応用自由美術教育実験アトリエとバウハウスのカリキュラムの類似点は多い。この点が1906年にワイマールに設立され、ヴァン・ド・ヴェルドが

校長を務めた大公立美術工芸学校とともに、応用自由美術教育実験アトリエがバウハウスの先駆的な組織と捉えられる所以である。実際、バウハウスの校長の人選を行ったヴァン・ド・ヴェルドはオプリストと、バウハウスの初代校長であるグロピウスはデプシツと交流があり、彼らが応用自由美術教育実験アトリエの教育に強い関心を寄せていたことが判っている。そうした交流を通して、応用自由美術教育実験アトリエの教育理念とカリキュラムが直接間接にバウハウスに影響を与えた可能性も考えられよう。

オプリストは難聴の悪化により、1904年には引退せざるをえなくなったが、彼の理念を受け継いだデプシツが学内に商業施設としての工房や展示室を開設し、学外のいくつかの工房と契約することで応用自由美術教育実験アトリエでは活発に工房教育が展開された。こうした工房を中心とする工芸教育がミュンヘン手工芸連合同工場の中心的なメンバーの考え方と共通しており、ミュンヘン手工芸連合同工場に関わる活動の中で培われ、そのメンバーたちが共有していた工房教育の理念がオプリストを通じて応用自由美術教育実験アトリエに反映されたと考えることもできるだろう。

以上の教育施設の他にも、ミュンヘン手工芸連合同工場に図案家として関わった芸術家たちはドイツ各地の美術工芸の教育施設において工房教育による教育改革を行っており、その教育内容についてはまだ解明されるべき課題が残っている。バウハウス以前の工房による美術工芸教育の改善については、今後も引き続き調査研究を行っていきたい。

註

- (1) Ekkehard Mai, Die deutschen Kunstakademien im 19. Jahrhundert: Künstlerausbildung zwischen Tradition und Avangarde, Böhlau Verlag, Köln, 2010, S. 344-7.
- (2) Ulrike Büttner, “Die Kunstgewerbeschule von 1896-1933”, Niels Büttner und Angela Zieger (Hrsg.), *250 Jahre Akademie der Bildenden Künste Stuttgart*, Stuttgart, 2011, S. 135-150.
- (3) *Jahresbericht der K. Kunstgewerbeschule und der Kunstgewerblichen Lehr- und Versuchswerkstätte zu Stuttgart für das Schuljahr 1901-1902*, Stuttgart, 1903, S. 20.
- (4) Büttner, Ebd., S. 141.
- (5) *Jahresbericht*, 1903, Ebd., S. 25.
- (6) Helga Schmoll gen. Eisenwerth, “Die Münchner Debschitz-Schule : Lehr- und Versuch-Ateliers für angewandte und freie Kunst, Hermann Obrist und Wilhelm von Debschitz, München, 1902 - 1914”, in: Hans M. Wiegler (Hrsg.), *Kunstschulreform 1900-1933*, Gebr. Mann Verlag, Berlin, 1977, S.68-82.
- (7) Hermann Obrist, “Die Lehr- und Versuch-Ateliers für Angewandte und Freie Kunst”, *Dekorative Kunst*, VII. Jahrgang, Heft 6, März 1904, S.228-232.

図版典拠

- 図 1 (Hrsg.) Alexander Koch, *Deutsche Kunst und Dekoration*, Band XX, April 1907-September 1907. 9, Darmstadt, S. 160.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

針貝綾, シュトゥットガルト教育実験工房とミュンヘン手工芸連合同工房との関わり, *デザイン史学*, 査読有, 13号 2015, 掲載予定

針貝綾, 『ヴュルテンベルク王立美術工芸学校教育実験工房シュトゥットガルト綱領及び規定』和訳, *長崎大学教育学部紀要*, 査読無, 1集, 2015, 187-198

針貝綾, 『ドイツ手工芸工房ドレスデン附属工芸専門学校および教育工房の指導原理, 規則, カリキュラム, 学則』和訳, *長崎大学教育学部紀要—人文科学—*, 査読無, No. 80, 2014, pp. 9-22

〔学会発表〕(計1件)

針貝綾, ヴュルテンベルク王立美術工芸学校教育実験工房シュトゥットガルト—ミュンヘン手工芸連合同工房との関わり, 沿革, 綱領—, *デザイン史学研究会研究発表会*, 2014年11月22日, 東京国立近代美術館講堂(東京都・千代田区)

〔図書〕(計1件)

針貝綾他著, 岩波書店辞典編集部編, 岩波書店, *岩波 世界人名大辞典*, 2013, 246, 927, 1087, 1775, 1878, 2000, 2246, 2357, 2534, 2591, 2940, 3064, 3121, 3152, 3298

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

針貝綾 (HARIKAI, Aya)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号 : 70342425